

安らぎの存在

昌平高等学校一年（埼玉県）

太田 采杏

突然、中学二年の生活が終わりを迎えた。友だちとの他愛もない話、大好きとは言えないが毎日受けていた授業、中学最後の大会へむけて全力投球しようと意気込んでいた部活、すべてが消え去った。最初、自分の身に起こったことを理解することができなかった。確かにニュースや新聞で新型コロナウイルスが、自分の近くにまで迫っているように少し不安には感じていた。でも、まさか突然、こんな生活が始まるなんて想像などしていなかった。不安でたまらなかった。何をすべきなのか、悩んだ。苦しかった。そんな時、ふと、私は和室にあったお琴に手を伸ばした。祖母に習い、たまに気が向いたときに弾くくらいの存在だったが、この時はなぜか、お琴の音色が無性に心に響いた。私に寄り添ってくれているように感じられた。私たち人間にとって、自分たちの文化は、時に手を差し伸べ助けられるのかもしれない。

休校中、学校の感覚を忘れないように学校の授業と同じような時間割で生活をした。でも、やはり、学校で過ごすのとは違い、時間を持って余すこともあった。そんな時、姉が、私に茶道のお点前をしてくれた。とはいっても、全部の道具がそろっているわけではなく、代用品がいくつもあった。それでも、私には、そのお点前が新鮮だった。正直、花より団子の私には、はじめ、お菓子のほうが魅力的であった。しかし、ゆったりとした時間の中でお点前が丁寧に行われ、一つひとつの作法が意味を持っていることを知ったとき、感動した。そして、本当のお点前をみたい、知りたかと思った。当時、受験生としてまだまだスタートしたばかりではあったが、私も高校に行ったら姉のように茶道を学ぼうと思うきっかけになった。また、歴史の勉強をしていると、各時代のそれぞれ違う文化だが妙に身近に感じられ、勉強の際、私の背中を押してくれた。

今春、私は、念願通り高校で茶道部に入部した。コロナ禍の中での部活は、感染防止対策により突然部活が中止になることもある。人数制限があり、みんなで一緒に行くこともままならない。でも、茶道を学べることは、私にとって有意義な時間である。まだ、始めたばかりで右も左もわからないことだらけだが、お道具を間近で見ることや、お作法、所作を学び、意味の深さを改めて知ることや楽しさと、興味はやまない。

私は、幼い頃から着物やお琴などを通して、日本の伝統文化にある程度触れ合ってきた。しかし、私の周りを見ると、日本の伝統文化に触れる機会がある人は多くはない。せっかく日本で生活しているのだから、もっと日本文化を身近に感じたり、自信をもって人に紹介したり、伝えられるようになれないだろうか。そうしていかなければ、いつかこの文化は消えてなくなってしまうのではないかと不安になる。傳承していくには、実際に手に取ったり、見てもらうということが効果的だろう。茶道では、茶会などを開き、実際に茶道に触れることで興味がわき、身近なものになっていくのだと思う。だが、コロナ禍ではそれは難しい。でも、できることは必ずある。この混乱期を逆にチャンスと捉え、新時代に有効な手段を開拓し、大切な日本文化を守っていくことができたならこの上ない。そして、いざというとき、私たちの心の支えになる存在となつてほしい。

日本の文化は、わびさびといったような独特の世界観があり、言葉で表現しにくいのが、人の心をほっとさせてくれる。私がかつてお琴によって救われたように、多くの人がまた、茶道によって心を落ち着かせ、安らぎの存在として感じられるようになってほしい。そのために、私はこれから茶道を深く学び、少しでも力となり、関われるようになりたい。